



交通

評論

長い猛暑日に続き、各地の降水量の記録を塗り替える豪雨、竜巻や落雷など気象災害が相次ぎ、慎重な気象庁も「異常気象」という言葉を使い始めている。気象庁の定義によると、「30年間に1回程度しか起こらないような」ものを「異常」というのであるが、現存では1981〜2010年の値を「平年値」としてそれからのずれを用いている。今年の異常気象は日本だけでなく世界的にも異常な地域がある。

20年近く前に、気象大学校に勤務していた頃、学生

たちと一緒にIPCC（気候変動に関する政府間パネル）レポートの翻訳作業をお手伝いしたことがある。筆

者には「生物と化学」の部分の下訳が回ってきて、年末休暇を返上してなじみの専門用語と格闘した思い出があるが、そのころ、

たつたといつて喜べる事態ではない。「とうとう来てしまったか」と思う一方、その間何もできていないもどかしさのほうが大きい。

二酸化炭素濃度はシナリを通りの上昇をたどり、その結果として異常気象が説明されているわけであるが、因果関係に関しては、必ずしも実証されたものではないという意見もある。

最近、富士山頂で観測研究を行うグループの中で大気電気、つまり雷の研究者たちが富士山頂は夏季の雷観測の最適なサイトであるような観測は雷予測につながることを期待できるといっている。

異常気象

土器屋 由紀子

増加する」「極端な事象が増える」と予測されていたように記憶する。

当時はまた実感の湧かなかった温暖化の影響が、今年のような異常気象に遭うと急に実感を伴ってく

今年の5月9日に、400ppm(0.04%)の日平均値を記録した。すなわち、20世紀の小学生が、0.03%と教えられていた大気の微量成分としての二

界の基準観測地点であるハロイのマウナロア観測所で、今年の5月9日に、400ppm(0.04%)の日平均値を記録した。すなわち、20世紀の小学生が、0.03%と教えられていた大気の微量成分としての二

今年、それに加え、夏の間は、雲に覆われてなかなか地上からは観測のできない超高層の放電現象であるスプライトの撮影に7月21日と8月3日に成功している。これは、雲より高い位置にある測候所ならではの観測である。その上、このような観測は雷予測につながることを期待できるといっている。

温暖化の因果関係を突き止めて根本から対策を講じることが困難な中で、明らかに異常になっている日々の気象現象を、せめて早めに予報し避難する技術を開発するのが我々にできることと、そのためには、より正確でより広範囲の観測を続ける必要があるといえるのではないだろうか。

(江戸川大学名誉教授)